常滑市民俗資料館

友の会だより

第3号

吽阿
像像

高讃寺仁王門

昭和62年7月発行(1987)

昭和61年度事業報告

4月5日～5月18日	金士恒展後援
5月13日	視察見学会：愛知県陶磁資料館
7月28日	視察見学会：岐阜県美濃市
10月22日	友の会だより発行
11月2・3日	趣味の交換会
11月17日	視察見学会：岐阜県明智町
3月2日	友の会だより発行
2月14日～3月31日	わがやの歴史展Ⅰ共催

〈拓本部会〉

5月11日	懇談会	
6月8日	拓本実習	「資料館収蔵品」
7月13日	拓本実習	「資料館収蔵品」
8月10日	拓本実習	「資料館収蔵品」
9月14日	拓本実習	「光明寺・歌碑」
10月12日	拓本実習	「常石神社・碑」
11月9日	版画実習	「年賀・木版画」
12月14日	版画実習	「年賀・木版画」
1月11日	拓本実習	「資料館収蔵品」
2月8日	拓本実習	「天神山・碑」
3月8日	拓本実習	「総心寺・墓碑」

〈古文書部会〉

5月11日	懇談会	
6月8日	解読実習	「寄留届」
7月13日	解読実習	「拝借仕金子の事」
8月10日	解読実習	「浜砂場御裁許の事」
9月14日	解読実習	「一札・證文」
10月12日	解読実習	「鳥殺生につき定」
11月9日	解読実習	「御目見願」
12月14日	解読実習	「大野村御検地」
1月11日	解読実習	「御物成皆済目録」
2月8日	解読実習	「御物成皆済目録」
3月8日	解読実習	「和宮様御下向の節」

〈陶芸美術部会〉

5月25日	懇談会
6月22日	古常滑と伝説
7月27日	焼物の基礎知識
8月24日	古窯あれこれ
9月28日	草木古窯見学
10月26日	焼物散歩道見て歩き
11月30日	縄文から弥生：技術
12月21日	縄文から弥生：生活
1月25日	縄文から弥生：生活
2月22日	縄文から弥生：文化
3月22日	縄文から弥生：文化

〈郷土史部会〉

5月25日	懇談会
6月22日	柴船権現
7月27日	醸造の歴史
8月24日	酒の歴史あれこれ
9月28日	郷土の祭と行事
10月26日	郷土の祭と行事
11月30日	郷土の祭と行事
12月21日	郷土の祭と行事
1月25日	伝説と信仰
2月22日	伝説と信仰
3月22日	伝説と信仰

昭和61年度収入支出決算
及び昭和62年度予算

収入の部

項目	61年実績	62年予算	備考
一般会費	214,000	155,000	
賛助会費	285,000	150,000	
寄付金	20,556	1,000	
雑収入	68,180	70,000	
預金利子	1,046	1,000	
前年度繰越		224,532	
合計	588,782	601,532	

支出の部

項目	61年実績	62年予算	備考
事務用品	20,900	30,000	雑印、事務用品
調達費		100,000	
通信費	149,350	102,000	切手、ハガキ
会議費		25,000	
謝礼	5,000	5,000	
印刷製本	140,000	210,000	友の会だより
講演会費		30,000	
交換会費		25,000	
負担費	49,000	25,000	賛助会員分
次年度繰越	224,532	49,532	
合計	588,782	601,532	

昭和62年度事業計画

＊ 赤井陶然展後援	4月3日～5月31日
＊ 視察見学会	5月中旬
＊ 友の会だより発行	7月上旬
＊ 視察見学会	10月初旬
＊ 講演会	10月中旬
＊ 友の会だより発行	10月下旬
＊ 趣味の交換会	11月3・4日
＊ 友の会だより発行	3月中旬
＊ わがやの歴史展Ⅱ共催	2月初旬～3月末

部会活動予定

拓　本　部　会

拓本実習　原則として毎月第２日曜日

AM10：00～

古 文 書 部 会

解読実習　　〃

PM1：30～

陶芸美術部会

土師器、須恵器　原則として毎月第４日曜日

AM10：00～

郷 土 史 部 会

伝説と信仰　　〃

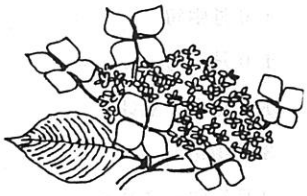
PM1：30～

部会活動への参加について

部活動は、拓本部・古文書部・陶芸美術部・郷土史部に分けて実施しています。

拓本部では碑文・紋様などの採拓実習・版画・篆刻などを、古文書部は主として江戸時代から明治初期時代の古文書の解読研究を、陶芸美術部では今年度はおもに土師器・須恵器を中心として勉強し、また古窯の発掘現場の見学など考えております。郷土史部は本年の予定として、常滑市を中心にして伝説とか信仰についての調査研究を考えています。

何れの部へでも会員なら参加は自由です。二つ三つと重復参加も大歓迎します。会員には毎月「ハガキ」にて連絡しておりますので、都合のつく方はふるって御参加下さい。お待ちしています。



昭和62年度役員

３月に友の会の皆さんに対して新年度役員の選出をお願いし、その中で新しく役員を倍増し、次の２５名の方に役員をお願いしました。二年目を迎えて更に充実した活動を展開すべく頑張っています。よろしく!!

〈名　　簿〉

会　　長

山田　勝治

副 会 長

片山　忠義　　杉江　重剛

監　　事

衣川　俊平　　間瀬　明治　　間瀬　良平

谷川　省三　　鬼頭マサ子　　本田　　仁

市野　　昭　　杉江　徳胤　　山田　　勇

村田　正雄　　渡辺　栄造　　竹内　金二

中野　健三　　藤井　式三　　西本　六郎

書　　記

北川　副夫　　増田　静子

会　　計

村田　　御　　高松　久春　　渡辺　千鶴

監　　査

鯉江　俊三　　桑山　浅美

顧　　問

山田　陶山　　長谷川　進

二代将軍秀忠の弟
松平忠吉と冨松家
の関係に就て

西郷弾正左衛門正勝は豊橋地方を支配した豪族である。西三河の雄、松平氏と好を通じて居たが、永禄５年（1562）今川の臣、遠州宇津山城主朝日奈泰長に居城月ヶ谷城を急襲され、長子元正共に戦死した。

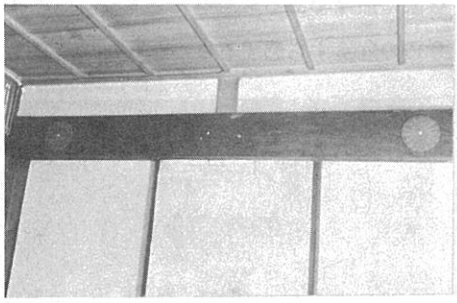
跡目は二男清員（きよかず）が継いだ。正勝に一女あり、松平の家臣戸塚五郎大夫忠春に嫁いで女児を生む。此の女性が二代将軍秀忠及び、尾張清州城主松平忠吉の母お愛である。お愛の父戸塚忠春は松平の家臣とだけで精しい事は判らない。

広目の冨松与作氏の説に依れば、越前朝倉氏の一族で、元亀元年（1570）織田信長に滅ぼされた。右ェ門督義景の叔父に当る人であり、義景との仲が悪く、宗家を離れ、三河松平の家臣となったと云われる。その父忠春も永禄５年（1562）武田軍と戦い、遠州大森で戦死したので、母と共に伯父西郷清員に身を寄せた。が、後に母は松平家臣服部平大夫正尚と再婚した。

現在の冨松家

愛は本家従兄西郷義勝と結婚。ところがその義勝も竹田信玄の将秋山晴近と戦い設楽郡竹広で戦死（元亀３年，1572）したので、母の婚家服部平大夫の許に身を寄せる事となった。たまたま平大夫の屋敷を訪れた家康の目に止り、伯父西郷清員の養女として直ちに浜松城に入り側室となった。

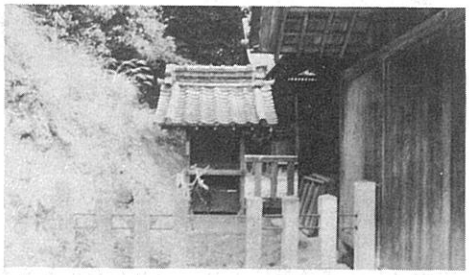
お愛は前述の如く、東三河の名門の出身で教養も高く、温和な性格で家康に誠実に仕えたので、多くの側室の中でも一番お気に入りであった。（現在静岡の宝台院にあるお愛の墓は側室墓碑中最も立派である。）天正７年（1579）秀忠誕生（長松丸）、翌年庚辰９月１０日、忠吉（福松丸）出生。同９年、家康は三河東城松平家の絶えるのを惜み、福松を松平甚太郎家忠の養子として東条城に入り、一万石を与え名も忠康と改める。



梁に菊の紋の飾りがある

同１０年（1582）福松２才の時、駿州沼津城主４万石を領す。同１８年（1590）１０才の時、京師で元服、叙従五位下下野守に任ぜられる。文禄元年（1592）武州忍城に転じ、十万石を賜わり、此の年１０月１１日、井伊兵部大輔直政の息女と結婚。慶長５年（1600）関ヶ原の役に大功を勲て、１１月15日尾張国57万1720石賜わり清州城主となる。同６年従４位下侍従、同１０年４月１６日叙従３位左近衛中将。同11年薩摩守と改む。同１２年３月５日、芝浦大久保忠常の別邸で薨去、御年２８才。以上が正史として伝わる忠吉の伝記であるが、台徳院殿御実紀には、「台徳院殿御諱は秀忠、東照宮第三の御子。御母は西郷氏愛の方と聞えし後に従一位を贈られ宝台院と申す。宝台院殿、実は戸塚氏にて五郎大夫忠春といふものの女なりしを、

外祖西郷弾正左衛門正勝が子左衛門尉清員養ひて子とし宮仕まいらせしかば西郷の局と称せしなり」（以貴小伝）とあり、之れが冨松説同家の祖先が松平忠吉であり、且つ皇家の血統であるとの根拠と思われる。宮仕したお愛は、第百六代正親町天皇の皇子誠仁（さねひと）親王の第四皇子を姙り、伊セ朝倉氏の知辺宅で出産（天正３年1576）天正８年秀忠の弟として浜松城に入り、その後沼津城主、武州忍城主。関ヶ原の戦いの後、清州城主となり。尾張一国を領する事となるが、皇家の血縁である事が厄いして家康に警戒され身辺の危険すら感ずる様になった。慶長１２年



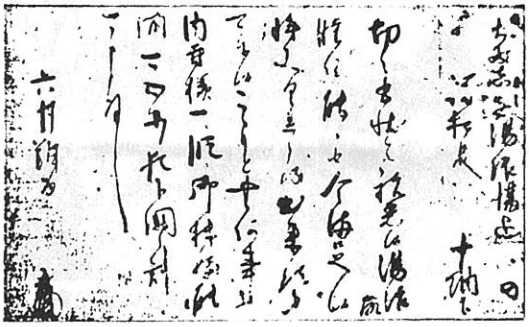
忠吉を祀ったという伝承をもち、かっては皇宮社の名で呼ばれたほこら

（1607）江戸城落成祝い言上の為江戸に上り、芝大久保邸に滞在中、以前よりの病気が重くなり、将軍秀忠のすすめもあり清洲に帰り、養生する事となり、芝浦の大久保別邸に来たのを機に遂に意を決し、家臣鷺坂段之亟を替玉として秘かに江戸を脱出、清洲へ帰り、数名の家臣と共に広目村の朝倉景良を頼ったが、過ぐる関ヶ原の戦の砌、鳥羽水軍九鬼義隆に攻められ既に亡く、二代目朝倉喜右ヱ門方に身を寄せ、剣を鍬に替えて一農民として隠遁生活を送る事となる。而してその喜右ヱ門も早逝したので三代目庄屋を継ぎ、名前も皿井喜右ヱ門と改める。寛永６年（1629）５５才を以て波瀾に富んだ生涯を閉じる。法名空賀慧良居士と云う。以上が冨松与作氏が多年調査された家系の概要である。その出典等に多少の疑問点もありますが、『正史に非ず間違いなり』と否定する事は出来ないと思います。現在伝えられる正史、必ずしも真実であるとは限りません。即ち身替りとなった鷺坂段之亟の墓が現在西春日井郡新川町正覚寺にあり、その戒名も称念院丹入禅定門と云う。此の寺は忠吉が武州忍城より清洲へ移封された時お愛の墓と共に現在地へ移転された寺であり、忠吉死去の後、尾張の国主となった義直の命に依り、名古屋へ再度移転、名も性高院と改められ、忠吉の菩提寺として名古屋市千種区幸川町にあります。正覚寺は其の後尾張藩士の菩提寺となり、今日に至って居ります。段之亟の墓碑の存在が確認され、又、台徳院実紀のお愛（西郷の局）の宮中の勤めの模様等、知り得たならば、正史の修正も可能となります。

以上が去る３月１５日、私がお話し申し上げた講演のあらましですが、猶不明の点も多々ありますので御気付の事柄等ありましたならば、御教示賜り度いと願っております。

以　上

友の会郷土史部担当　　片　山　忠　義



秀忠書状（一）

（端裏切封ウハ書）
「知多しを湯治場迄　の
福松殿　　中納言」

切々書状令祝着候湯治故
腫物能候由令満足候
将又具足之儀出来次第
可参候こゝもと無何事
内府様一段御機嫌能候
間可心安候猶下国之刻
可申候謹言
六月朔日　　秀（花押）

平野雄丈氏蔵

見学会

岩村城と水野監物の関係

5月14日、友の会の岩村城趾見学旅行で、昼食時私が思いつくまま、岩村城攻撃の部将の中に常滑城主水野監物が居たかも知れない。後日調査をして皆様に報告するとお話し申し上げました。その報告です。

先ず、岩村町で頂いたパンフレットに、信長は天正3年3万の兵を以て岩村城を陥落させ、女城主以下を磔にしたとあります。

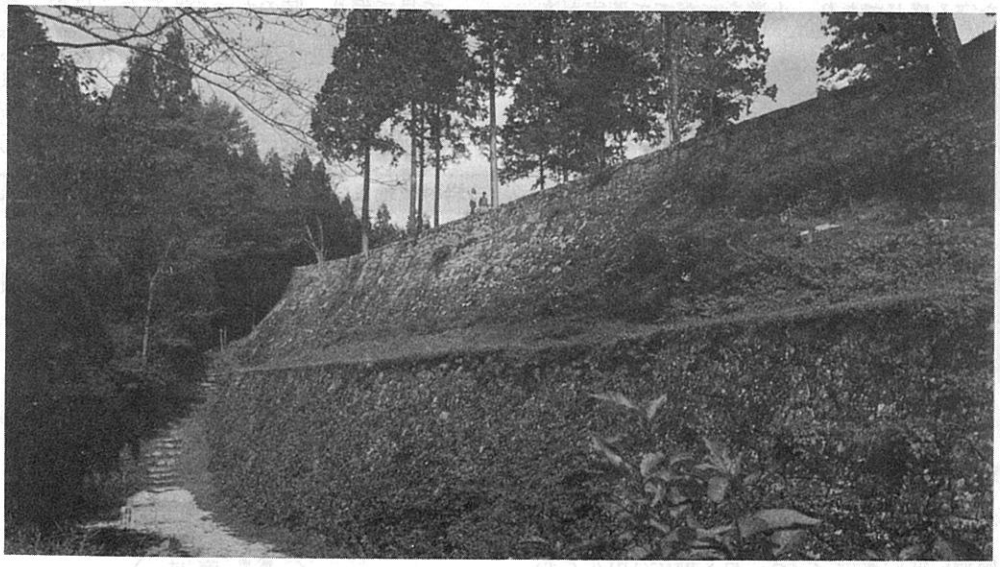
此の戦には、水野監物は参加していなかったと思われ、その後岩村城は森蘭丸の領地となっております。

信長公記(しんちょうこうき)に依れば、天正10年武田勝頼攻略の為、岩村城より2月14日瀧川左近将監、河尻与兵衛、毛利河内守、水野監物、水野宗兵衛を信州伊奈口へ進発とあり、3月11日勝頼父子が駒飼の山中田野の平屋敷に居る事を知り、瀧川左近等が之を攻撃、勝頼一族は此の処当りにて自害…とあります。従って水野監物の岩村攻撃参加は、天正3年ではなく、天正10年勝頼攻めの際である事が判りました。次に水野監物の当時の消息を少したどって見ましょう。

天正2年5月8日、京都の監物宿舎で連歌の会「水野監物亟守隆興行」が催されており、又同年7月23日、伊勢長嶋の一向衆徒攻撃に参加、天正4年3月、大阪石山本願寺攻め、同5月大阪住吉に攻撃拠点築城本陣、信長より監物宛の書状が残されています。

同4年8月には津田宗及の茶会に出席。其後宗及・利久の茶会記には度々監物の名が出て来ております。監物に関しましては、常滑城と共に他日お話し致し度いと考えています。

片山忠義



岩村城址の石垣（別名霧ガ城）

山あいの道をうねうねとカーブしながらバスは登っていく。外は雨で煙り、山は霧が懸り、遠くまでは見えない。墨絵の風景である。岩村町へ着き、役場の森さんという方の御案内で木

村家へ行く。家に一歩入ると、お天気の悪いせいもあるが、暗い土間で右手が帳場らしいところをぬけて、高いふきぬけの上から明かりのさす所から、小さい部屋を三つほど通り、お座敷まで上って説明を聞く。殿様やお姫様もおいでになったというお座敷だそうだけれど、意外に狭く質素な感じがする。部屋数が２８もあるとの話に皆ほーと声を挙げた。ここの御当主は、９０才のおばあちゃまで今も健在でいらっしゃるそうだ。歴史と共に生きてこられた方だと思う。

外へ出て裏へ廻ると、なまこ壁がしっかりと家を守る感じであり、小道をへだてて茶室があ

るという庭も、木々が茂り奥までは見えない。町並は落ち着いた昔の趣はそのまゝ続いて、誰かが大正村に似ているねと言ったが、せまい道の両側に低い家がつづき、古く静かな町だと思われる。木村家のすぐ近くの浄光寺も拝観し、どっしりした古さを大切にしておられるのを感じる。

昼の食事の時、片山さんが岩村城を攻める方に、常滑も加わっていたようですみませんと、森さんにあやまり笑いのうちに過ごす。岩村城址へ向い、麓の新しく明るい感じの、歴史資料館に入り、森さんの説明を聞きながら、鉛筆も使って書かれてある大きな古い絵図面やら、書物やら、日本初といわれる英話辞典などに感心して見入る。又歴史資料館の裏にある、ひなびた農家の建物の民俗資料館に入ると、右手が馬舎になっていて作られた白い馬が迎えてくれた。集められた古い生活用具のいろいろに、皆ああこ

れは家にあったとか、今もあるとか、懐かしがって見て廻り、時のたつのも忘れるほど…。こんなに古い物を大切によく集められたと感心する。もうバスに乗って下さいとせかされて、心を残しながら帰路につく。１日中雨に降られて、岩村城址まで登れなくて、まわりの風景を見られなかったのも心残りだったし、悲哀の女城主に思いを寄せるまでにも、時間が足りない感じがして、又ゆっくり来たいくらいと話をしていた。平和な時代のよき１日に感謝をしています。

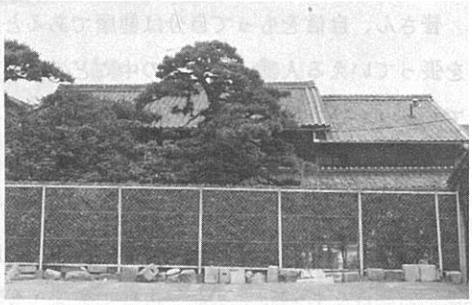
増田静子

岩村局風景印

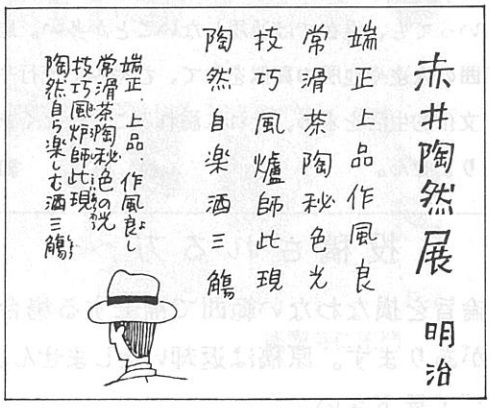
◇投　稿　欄◇

常滑窯中興の館

鯉江俊三



江戸末期、世木の初代赤井陶然の隣に大窯を構えた鯉江小三郎家は、古い由緒の歴史を持つ鯉江佐次右ヱ門の分家で、文化年間の終り頃、一儲けするには、瀬戸方面の窯屋が焚いている様な登窯を導入して甕や鉢類の焼けむらを少なくし、然も薪代の安くつく様にする事が一番だという話を耳にして、密かに工夫を凝らしたといわれます。併し、窯の中で焼く品物や焚き方が他所とは違う為、すぐにはうまく焼けず、それこそ血の滲む様な試行錯誤を繰り返えし、凡そ十数年に及ぶ苦闘の歳月を経て、漸く天保の初年に至って常滑式登窯の成功を見たという事であります。それ以来、鯉江家はこの窯のお蔭で繁盛を極め、剰え尾張藩からは煙硝壺の御用命を載くやら、又殿様（源順公）からは初代尚方を始めとして、以後代々に渉って、苗字帯刀を許される身分にお引き立て載いたという事であります。斯くして、天保13年には、やがて3代目を継く方寿も亦大きく成長して、妻を迎える事になり、あたかもこの三夫婦の揃った窯場へ、翌14年には、時の藩主斉荘公がお成りになる等、その勢いは実に素晴しく、勿論登窯の成果も大いに挙がって、ここに弘化3年丙午の年に至り、遂に表題の大本宅を建造して、その全盛を誇ったという事であります。其の後、これが明治維新へと受け継がれ、この大きな基盤の上に立った方寿が、いみじくも勝れた土管の創製に成功し、これが登窯と共に町中に広がり、遂に陶管王国常滑の出現となった次第であります。尚、その外にも朱泥急須の向上、或は金欄手の試作、更には、常滑美術研究所の招致、引いては龍巻貿易の発展、或は新工芸の開発等、今日のＩＮＡＸを始めとする、わが常滑窯の多角的な製陶産業の基礎作りに大いに貢献したといいます。そして、その悉くがこの館を拠点として行われたといわれます。しかし、残念な事には此の建物が日清戦争の頃、故あって、成岩の素封家竹内佐次右ヱ門家の手に移り、爾来正に百年の歳月を経ましたが、その間殆ど私共の目に触れることもなく、又その由来もあまりよく知られておりませんでした。しかし、今や時代が21世紀を迎えんとするに当り、所謂温故知新の文化が尊重される風潮ともなって、幸いにも長年に渉って、大切に保管されて来られた竹内家におかれては、この趨勢に深い御理解を示され、此の建物の里帰りに、快く応ずるとの御意向を示されておられます。玆に、会員各位の格別の御関心を賜わりたくと存ずる次第であります。



真の健康生活をめざして

皆さん、自信をもって自分は健康であると胸を張っていえる人は、この世の中にどの位いるでしょうか？　私たちは真の健康を維持する為には、先ず人間環境の問題があります。

それは人間生活の基本である衣・食・住です。その第１は、「衣」の問題ですが、むやみに厚着するのはよくありません。流行やスタイルを気にすることはある程度必要かも知れませんが、健康上の大事な問題です。できるだけ薄着に慣れることです。

次に「食」の問題です。なんといっても自然食に親しんでバランスのとれた食事をすることです。いたずらに美味美食になれることは感心しません。

次は「住」についてですが、生活環境の問題が一番重要なことです。立派な邸宅より、日照・通風のよいこと。暑いといってはクーラー、寒いから暖房というのもほどほどにしたいものです。

このほかに大きな問題は人的環境です。これは心の健康に大きな影響があります。家族・親子の関係、近所つき合いの問題、その他職場とか学校などの影響があります。また、時代的環境ということもあります。めまぐるしく変わる社会的環境が大きな問題です。昔はこうだった、ああだった。物は大切にしなくてはならないといっても、現在では通用しないことが多い。周囲の人達や他所の真似をして、むやみに流行や文化的生活を求め、それに溺れることはよくありません。　　村田　御

木造仁王像　二軀

西阿野　高　讃　寺
高さ（二軀共）３０３.０糎
愛知県指定文化財
（昭３６.３.３０）

阿形像は右手にて独鈷をかかえもち、左手は地を圧するような姿に作られている。巨木を割って像の形を造り、表面は布張りをして彩色を施し仕上げをしたものであるが現在は彩色は殆んど剝落している。この作は、顎の一部を破損し、左の乳首を失っている外、右手の指先の全て、左手の第四、五指の先は後補である。

吽形像は、左手に独鈷をとり、右手を額にあてて、望見する姿勢をとっている。造法は阿形像と同様である。この像は、右手の第五指の先が後補であるが、左手は当初のもののようである。両像の頭上にひるがえる天衣は当初のものではないが、かなり古いものである。この仁王像は、誇張が少ない割には、力感があり、その制作年代は鎌倉時代とみるべきであろう。

交換会のお知らせ

日　時　　１１月３・４日
会　場　　民俗資料館２階

所蔵の品物を持ち寄り希望の方々と交換していただきます。点数制限はありません。

品物の種類は美術工芸品、民芸品、書籍、印刷物……など。できれば珍品、資料的価値があれば結構です。参考出品も歓迎します。

投稿される方へ

論旨を損なわない範囲で補筆する場合があります。原稿は返却いたしません。ご了承下さい。

昭和６２年７月１０日　発　行
発行　常滑市民俗資料館友の会
常滑市瀬木町４丁目２０３番地
TEL〈05693〉4—5290(有線)54-429